横浜における輸出生糸の検査に関わる建築に見られた遮光装置

THE SHADING EQUIPMENT THAT PUTTED IN THE WINDOW FOR
TESTING THE EXPORT RAW SILK IN YOKOHAMA

二村 悟*, 後藤 治**

Satoru NIMURA and Osamu GOTO

In Yokohama many companies exported raw silk at the end of 19th c. In the beginning of 20th c. some trading companies had the shading equipments that putted in the window for testing the quality of the raw silk. That equipment was invented for testing the great deal raw silk in 1901 when the national institute for testing the raw silk was enlarged. After that the equipment prevailed to the trading companies. In Yokohama at the end of 19th c. the tea trading companies used the similar equipment called "HIYOKE" for testing the quality of the tea. The equipments for the raw silk followed ones for the tea.

Keywords : Yokohama City, Raw silk, Equipment, Industrial Heritage, Tea Industry

横浜市, 生糸, 建築設備, 産業遺産, 茶産業

1 はじめに

明治期の横浜市内には、輸出生糸に携わる商社を中心に、特異な建築設備が外壁面に付設している建物が存在した。この設備は、生産者から持ち込まれた生糸の出来栄を判別するためのものだった。生糸生産や養蚕に関わる民家建築については、今和次郎、伊藤鄭爾を始めとして多くの研究¹⁾が為されてきた。また、横浜の都市や建築についても多くの研究がある²⁾。けれども、横浜における輸出生糸に関わる建築については、現在まで学術的にはほとんど注目されておらず³⁾、その設備に注目した研究も無い。

本稿では、横浜に見られた輸出生糸の検査に関わる建築の設備に着目し、その特徴やそれが普及した背景等を知ることを目的とする。

2 遮光装置の仕様と用語

この設備の構造や機能については、昭和8年刊行『生糸品位検査並に格付の実際』(以下、「検査仕様」と呼ぶ。また『』内は後掲の参考文献とする。)に以下のように触れられている。

肉眼検査室は室の北方中央の壁に窓を設け、他の三方は黒幕張りとして室内の反射光線を防ぐ様装置せられたる長方形の部屋で、窓は床面から約九十糎(約三尺)の所に幅約一米突二十糎(約四尺)、高さ約一米突四十糎(約四尺六寸)の大きさ(中略)。窓外の反射光線を防ぐ為に窓の外側下部からは内面黒塗の遮光装置を四十五度の角度に上部に向って斜に突出せられて居ります。斯様に作られてあるので窓外の反射光線の侵入は防がれ、光線は只北方天空のみから入り来るのであります。⁴⁾

このように、設備は「遮光装置」と呼ばれており、生糸の肉眼検査をするための部屋につくられていたことがわかる(以下、本稿ではこの設備を「遮光装置」という)。肉眼検査について同書は、

生糸品位決定上その補助となるもので荷口の総荷について、肉眼と手触によって整理の状態及び性状を検査(中略)性状のうち色相は種類及び着色程度について光沢は種類及び光沢程度について⁵⁾

検査を行うものとしている。⁶⁾

3 横浜における遮光装置

3-1 絵画資料と古写真に見る遮光装置

遮光装置の現存例は無いが、数種類の古写真に確認できる。

A:『THE JAPAN ADVERTISER DIRECTORY』、B:『実業之横浜』、C:『スレート商会写真帳』、D:『横浜生糸検査所六十年史』、E:『建築写真類聚』、F:『PRESENT-DAY IMPRESSIONS OF JAPAN』、G:『日本蚕糸業史 第二巻』、H:『横浜生糸検査所建設記録』、I:『横浜銅版画』⁷⁾所収の『横浜諸会社諸商店之図』である。

A は、明治36年に発行された日本国内に在住した外国人の人名録で、建築や地図の図版が掲載されており、その中で1点、251番・富士貿易商会 A-1 [図1] に確認できる。

B は、明治44年10月に発行された横浜の商業に関わる情報を掲載した写真入の月刊誌で、216番・矢野上甲合名会社蚕糸部 B-1 [図2] に確認できる。B-1 は、同じ店舗の上下に2箇所の遮光装置が確

* 工学院大学工学部建築都市デザイン学科
客員研究員・博士(工学)

** 工学院大学工学部建築都市デザイン学科 教授・博士(工学)

Guest Researcher, Kougakuin University, Dr. Eng.

Prof., Kougakuin University, Dr. Eng.

認できるので、下をB-1①、上をB-1②とする。

Cは、明治42年に発行されたスレート商会の施工例を掲載した写真帳で、256番・ウィングラー商会C-1〔図3〕に確認できる。

Dは、昭和34年に発行された横浜生糸検査所（以下、「検査所」という。）の変遷を記したもので、その中で2点、「正量部拡張増築」D-1〔図4〕⁸⁾、「品位部拡張増築」D-2〔図5〕に確認できる。

Eは、大正6年発行の用途別に近代建築の図版を集めたもので、177番・三井物産横浜支店E-1〔図6〕に確認できる。E-1は、2・3階の2箇所を確認できるので、下をE-1①、上をE-1②とする。『建築雑誌305号』では、E-1を「生糸試験室」に続く「見本室」として、「二階の一隅倉庫に通ずる路を兼て施設し拝見窓を付す」としている。これによって、肉眼検査が当時「拝見」とも呼ばれ、遮光装置が付いた検査に用いる窓を「拝見窓」と呼んだことがわかる。⁹⁾

Fは、大正8年に発行された日本各地の産業とその風景を撮影したもので、その中で7点、47番・クーバー商会F-1〔図7〕、90番・シーベル&ブレンワルト商会F-2〔図8〕、93番・ウィトコフスキー商会F-3〔図9〕、183番・バルモン商会F-4〔図10〕、200番・アイザックス兄弟商会F-5〔図11〕、225番・中外貿易商会F-6〔図12〕、横浜貿易倉庫G倉庫F-7〔図13〕に確認できる。

Gは、昭和10年発行の蚕糸業について記した全5巻の総合書で、その中で1点、帝国蚕糸倉庫株式会社G-1〔図14〕に確認できる。

Hは、大正15年竣工で、昭和7年の増築時に図面や写真で記録したもので、総荷検査室H-1〔図15〕に見られる。立平面図では、1階の総荷検査室に、同一形状の遮光装置が13箇所確認できる。

Iは、明治16～24年に描かれており、生糸・茶貿易の中心となった日本人町に建つ商家を描いた資料で、生糸売込直輸商・貿易商会I-1〔図16〕のみ確認できる。また、Iの『横浜銅版画』にともに所収されている『日本絵入商人録』には、F-2の「横浜新九十番内部之図 シーベル・ブレンワルト商会」が紹介されている。そこには〔図8〕と同じ建物が描かれ、遮光装置のようなものが見られる¹⁰⁾。

このように、遮光装置は明治30年代から昭和期まで幅広い時代に見られる。

3-2 遮光装置の年代と仕様

遮光装置の設置時期を一覧で示したものが〔表1〕、収集した遮光装置の仕様を一覧で示したものが〔表2〕、遮光装置の側面形状を年代順にまとめ、縮尺を合わせて作図したものが〔表3〕である。

〔表1〕から、設置年代はI-1を除くと明治20年代初頭まで遡るものはない。また、検査仕様が刊行された昭和8年には、既に遮光装置が必要な設備として位置付けられていたことがわかる。

設置位置・場所は、18例中12例が主屋、6例が倉庫と見られる建物である。2階以上の設置が18例中13例、1階が5例である。A-1、B-1①、F-4が出入口脇や敷地内の脇道沿いである。

側面形状は、11例が三角形である。B-1①②、E-1②、F-3、F-4、F-7、H-1については、特徴的な形状を持つ。

幅は、最大がB-1①・I-1の5尺、4尺が4例、3尺が4例、2尺が7例である。

高さは、最大の1間半がE-1②、F-3、1間が3例、5尺が6例、4尺が6例、3尺が1例である。

表面仕様は、F-6のように板材で箱型に構築したもの、板張りを

棧で押える仕様などが見られる。

3-3 遮光装置の特徴

このように、遮光装置を分析すると以下のような特徴が見られる。

設置場所が2階に多い理由は、肉眼検査は多くの荷の見本をそれぞれ検査するので広い場所が必要とされる。運ばれた荷を事務手続きし、1階で「括解き」¹¹⁾と呼ばれる荷解きをする。このため、広い場所が確保できない商社は、肉眼検査を上階で行ったと考えられる。検査所(H)は、RC造平屋建ての荷解場を700坪確保している¹²⁾。庁舎の延床面積が831.1坪なので、必要とする面積の大きさがわかる。

A-1は〔図1〕を見るように建築面積が小さく、通路を挟んで別棟の建物が隣接している。このため、通常、荷解場と検査場とは同じ建物内にあるが、別棟にあった可能性もある。

検査仕様に記されるように、肉眼検査には光が重視された。『検査時報 No.205』では、天然光線と人工光線の見え方の違いを触れている。本来は天然光線が良しとされたが、近代化により人工光線となる¹³⁾。遮光装置が上階に多いのは、遮るものが減り、光を取り込みやすかったことも、その原因のひとつではないかと考えられる。

〔表1〕遮光装置設置年一覧

番号	上限	下限	凡例
A-1	明治27年 ^{註1}	明治36年	無印:刊行年
B-1	明治44年 ^{△註2}		[△]:創業年
C-1	明治26年□□	明治42年	[▽]:開業年(既に創業しているが、改めて横浜で開業した年)
D-1	明治34年○		[□]:社名変更による上限・下限
D-2	大正7年○		[□□]:存在が確認できた年
E-1	明治44年○	大正6年	[○]:竣工年
F-1	明治42年△	大正8年	[○○]:生糸輸出を開始した年
F-2	明治26年△	大正8年	[▽▽]:閉業年
F-3	明治24年△	大正8年	
F-4	大正3年▽	大正8年	
F-5	大正元年▽	大正8年	
F-6	大正6年△	大正8年	
F-7	明治29年○	大正8年	
G-1	大正15年△	昭和10年	※それぞれが掲載された資料のほか、『図説横浜外国人居留地』『三井物産初代社長』『日本蚕糸業史 第二巻』『開港と生糸貿易 上巻』『開港と生糸貿易 下巻』『横浜生糸検査所六十年史』、横浜開港資料館による調べ。以上の文献等により作成した。
H-1	昭和7年○		
I-1	明治13年△	明治24年	

註1:A-1は、明治26年刊行の『横浜貿易雑誌』には存在しない。

註2:B-1は、明治23～33年まで製茶輸出商・フレーザー・ファーレー商会、明治34～43年まで製茶商・メーシー商会が存在するので、上限は明治44年である。

〔表2〕遮光装置一覧

図	番号	設置場所	設置位置	方位	位置	幅	全高	横機間隔	表面仕様
1	A-1	主屋	2階窓	北東	脇道	2尺	4尺	なし	一枚板で箱型に構築
2	B-1①	主屋	入口左脇	北西	表通り	5尺	4尺		板張り格子棧押え
	B-1②	主屋	2階窓	北西	表通り	4尺	4尺		板張り格子棧押え
3	C-1	主屋	2階窓	東南	表通り	2尺	5尺	-	縦板張り横棧押え
4	D-1	主屋	1階窓	南東	表通り	2尺	1間	-	-
5	D-2	主屋	1階窓	南東	表通り	4尺	5尺	1尺	板張り縦棧押え
6	E-1①	主屋	2階窓	北東	表通り	2尺	1.5間	なし	一枚板で箱型に構築
	E-1②	主屋	3階窓	北東	表通り	2尺	1.5間	-	-
7	F-1	倉庫	2階窓	北	表通り	4尺	5尺	-	-
8	F-2	倉庫	2階窓	北	敷地内	4尺	5尺	-	-
9	F-3	主屋	2階窓	北	表通り	3尺	1.5間	-	-
10	F-4	主屋	入口左脇	東南	脇道	2尺	4尺	-	縦板張り横棧押え
11	F-5	主屋	2階窓	北	表通り	2尺	4尺	-	-
12	F-6	倉庫	2階窓	北東	表通り	3尺	1間	なし	一枚板で箱型に構築
13	F-7	倉庫	2階窓	-	敷地内	2尺	4尺	-	-
14	G-1	倉庫	3階窓	東	敷地内	3尺	3尺	-	-
15	H-1	主屋	1階窓	北	敷地内	3尺	1.5間	2尺	板張りトラス棧押え
16	I-1	石蔵	2階窓	-	敷地内	5尺	5尺		板張り格子棧押え

註①:幅などの寸法類は、人物や窓の大きさなどから判断した。 註②:「位置」はどこに面して日除けが設置されているかを示した。 註③:「-」は不詳。 註④:「主屋」は洋風の意を持った主たる建物のこと。 註⑤:方位については、所在を明治21年末現在の横浜地図を参照し、写真から確認した(『横浜のものはじめ考』参照)。

A-1 [図 1]

B-1 [図 2]

C-1 [図 3]

D-1 [図 4]

D-2 [図 5]

E-1 [図 6]

F-1 [図 7]

F-2 [図 8]

F-3 [図 9]

F-4 [図 10]

F-5 [図 11]

F-6 [図 12]

F-7 [図 13]

G-1 [図 14]

H-1 [図 15]

I-1 [図 16]

方位は、C-1、F-4、G-1が北に向かないのは、地割から北面することはできないためである。検査仕様に記されているように、基本的には北向きである。

幅は、室内の反射光線を防ぐため、検査に必要な最小限の幅を設定したと推定される。関東大震災以前の横浜における建物の構造は、A-1、F-1、F-2、F-4～6、I-1のように、多くが組積造であった。このため、構造上広い窓幅の確保が難しかった可能性もある。

側面形状については、三角形を中心とする。角度は、検査仕様に記された45度ではないものが多い。

〔表3〕遮光装置側面一覧

4 検査所の設置とその影響

遮光装置の普及に関係すると思われるものに検査所（D-1）の設置がある。

検査所の設置は、明治28年6月発布の生糸検査所法による。ここから、生糸の正量・品位検査¹⁹⁾が実施される。同年7月に生糸検査所の官制が發布、明治29年4月に生糸検査法が実施され、8月に検査所が開始し、翌年4月に生糸直輸出法が發布される。

〔図17〕は設置当初の検査所の姿である。検査所は明治34年に

増築される。増築は、検査所に隣接する横浜貿易倉庫の空地进行を借り足して行われる¹⁹⁾。〔図17〕の正面入口の右手〔図18〕に増築された状況がD-1である。〔図17〕には遮光装置が設けられていないので、検査所では明治34年の増築時に初めて設けられたことになる。

『横浜生糸検査所六十年史』（以下、「六十年史」と呼ぶ。）によると¹⁹⁾、明治29年8月5日の業務開始とともに肉眼検査が始められる。当時、検査所は、検査部3科、事務部2科に分かれていた。検査部第1科が受検生糸の総受付と原量検査及び肉眼検査であった。

検査法規定には、「品位検査請求に対し受附けたる生糸を先づ肉眼鑑定を施す（中略）最も必要となる条件」で、重要な検査項目に「一、色沢 二、手触（省略）」などがあげられている。これらは、前記の肉眼検査と同様である。更に、「附記」として、「肉眼鑑定は生糸買方に於て最も重要な条件であって開港以来外国商館にはこれに堪能なる技術者を配置していた。手合せに於て先づ拝見と称し、この拝見に及第しなければ商談は成立しない」としている。

〔図17〕明治29年 建設当初の検査所（『横浜生糸検査所六十年史』）

〔図18〕明治34年 検査所の増築配置図

また、「（明治）三十四年には前年より正量検査は四倍の増加となり（中略）検査室の狭隘（中略）を告げるようになったので愈々明治三十四年には（中略）正量検査室の増築を行わねばならざる」と、明治34年に検査所を増築した理由も記している。

このことから、明治34年に遮光装置が設けられたのは、単に検査を行うためではなく、検査量の増加に対応するためだったと考えられる。また、〔表1〕では、明治34年以降に設置されたものが相当数認められる。この点から見ると、多くの遮光装置は検査所の増築以降であり、検査所につくられた遮光装置を契機に流行した可能性が高い。

5 初期の生糸検査と遮光装置

次に、横浜における生糸検査と遮光装置の関係を検討してみよう。

横浜における初期の生糸検査¹⁷⁾についていえば、当時、横浜の商社では独自の検査が行われていた。昭和41年『検査時報 No.205』

の座談会、六十年史では¹⁸⁾、

初めは現在あるような生糸検査が行われず肉眼検査一本で生糸の判定がなされていた。(中略)昔、商社で行っていた拝見と今日、生糸検査所となされる総荷検査とは行き方が違っている。商社によってもそれぞれ流儀があったようだ。生糸買入の外国商館各自に於て彼等が欧州に於ける生糸売買上の経験に基く肉眼鑑定を試みて品質を鑑別

と述べている。このように、初期の輸出生糸の検査は商社ごとに方法が異なり、共通の方法を持たなかった。検査所は商社の要求する項目の検査を行うのみであった¹⁹⁾。『開港と生糸貿易 中巻』では、

外国商館の番頭が問屋へ巡って来て持荷を問合すと問屋の番頭は見本生糸一括乃至数括を示し直段の折衝を爲し荷主への照會値段に折合へば手合と稱し互にポンポンポンと三たび拍手する、斯くて荷物の全部を商館の倉庫に引込み一部分器械検査に附し成績可ければ總荷を解き肉眼検査を行ふ、之を拝見と稱している²⁰⁾

と、商社の肉眼検査について触れ、初期の検査方法に加え、E-1 同様に「拝見」という言葉を用いている。

このように、初期の輸出生糸の検査は、商社によって異なり、方法が確立されていなかったことがわかる。つまり、明治 20 年代初頭に遮光装置がほとんどみられなかったのは、遮光装置を使った検査法が確立していなかったことがその原因として考えられる。

検査法の確立は、明治 28 年 6 月発布の生糸検査所法に始まる。同法は、検査所の設置によって、商社で行われていた多様な検査法の取りまとめをはかったと考えてよい。検査所の必要性が謳われるのは、明治 25 年蚕糸業振興会綱領である。そこでは、「四.検査所を設けて生糸の信用を固くする事」²¹⁾とされる。けれども、検査所が設置された明治 28 年に遮光装置が無いことから、この時には遮光装置を使った検査法が確立されていなかったことになる。

検査所は設置されたが、当時は任意検査制度で商社を拘束する力はなかった²²⁾。しかし、「自明治三十二年至同四十一年各年間売込商、地方積戻高と検査件数割合比較表」²³⁾によると、明治 32 年 8858 件、翌年 9418 件、明治 34 年 31901 件と急増する。明治 34 年は検査所が増築され、遮光装置 (D-1) が設置された年である。つまり、検査量の増加によって検査方法を改良する必要性が生じ、遮光装置を使った検査方法が導入されたのではないだろうか²⁴⁾。

輸出品の増加は、独自に検査を行っていた商社にも、検査量の増加をもたらした。そこで商社は、検査所と同じ検査を行うことで、その増加に対応したと考えられる。そして、検査所に遮光装置が設置されると、商社もそれに倣って遮光装置を設けたのではないだろうか。ちなみに、検査所と同じ装置を設けることは、商社が自らの検査の正当性をアピールする上でも効果的だったと想像される。

こうして遮光装置が普及したと考えると、[表 1] で設置年代が明治 34 年より遡る可能性があるとした A-1、C-1、F-2、F-3、F-7 も、

明治 34 年以降に遮光装置を設けたとみてよいものと考えられる。

I-1 については、明治 13 年の創業時から茶も同時に扱っている。このため、次項で触れる前稿²⁵⁾で述べた茶輸出の日除けであった可能性が高いので、時代が遡ったものと考えられる。

その後、「横浜港主要輸出品輸出額」、「全国生糸生産統計」によると²⁶⁾、明治 39 年を境に横浜の生糸輸出が急増する。前記の検査件数も同様である。検査方法の改良と遮光装置の普及が、こうした検査数の増加を可能にしたのではないだろうか。

なお、検査が軌道にのると任意検査制度では互いに損失を招く恐れがあるとして、検査所を第三者として格付し審査を行うことの義務化が検討される。昭和 6 年 1 月、輸出生糸検査法改正とともに、輸出生糸検査法施行規則が発布され、昭和 7 年 1 月から実施される。輸出生糸の検査に対して検査所が強制権を持つのは、これ以降である²⁷⁾。この時、検査所には、大量の検査に対応するため、多くの遮光装置が設置されている [図 15]。

6 横浜における生糸輸出の遮光装置と茶輸出の日除け

横浜では、遮光装置と似た建築設備が、茶輸出に関わる商社や商家等にもみられた。その設備が、静岡で「日除け」(以下、茶輸出に関わる設備を「日除け」と呼ぶ)と呼ばれたことは既に報告した²⁸⁾。ここでは遮光装置と日除けとの関係を検討しておきたい。

旧稿から日除けの特徴・仕様等をまとめると以下ようになる。

日除けは、茶葉の輸出審査を行う建築設備である。北方のガラス窓に設置し、黒塗の板を軒に向かって 60 度の角度で斜めに 3~4 尺突き出すという大正 4 年の標準仕様がある。標準仕様には設置場所や幅は特に定められていない。横浜では日除けが明治 16 年以降に普及する。その実態は、①設置場所は表通りに面した主屋の 1 階に多く、②高さは 3 尺前後、③幅は 1 間前後、④側面形状は三角形で、⑤軒に向かって約 60 度の角度で突き出すという特徴がある。

日除けの標準仕様と横浜での実態を、遮光装置の検査仕様と横浜での実態と比較したものが [表 4] である。

ともに仕様と実態は類似するが、日除けの高さ、幅と側面形状、遮光装置の幅と突き出し角度は、仕様と実態が一致しない。

標準仕様と検査仕様を比較すると、寸法の明記の有無という違いはあるが、基本的な仕様は類似することがわかる。異なるのは、突き出す角度と側面形状で、日除けは 60 度で台形、遮光装置は 45 度で斜めに突き出すとあるので三角形と考えられる。

横浜における日除けと遮光装置を比較すると、方位や突き出す角度、側面形状は類似する。異なるのは、設置場所が日除けは 1 階で遮光装置は 2 階以上、高さが日除けは低く遮光装置は高い、幅が日除けは広く遮光装置は狭いことがあげられる。また、日除けの普及は、遮光装置の普及より早かったことがわかる。

[表 4] 横浜における日除けと標準仕様、遮光装置と検査仕様との比較検証

	方位	場所	遮光部分	色	形状				備 考
					床面からの位置	高さ	幅	突き出し角度	
日除け仕様	北方	窓を設け	東西南の三面は壁或は板張り	黒	高三尺内外	四尺二寸	三四尺	約六十度	側面形状は台形
実態	北方	壁に窓を設け、1 階に多い。	三方は板張り	黒	—	窓は不明。日除けは三尺前後。	1 間前後	約六十度	明治 16 年以降普及・明治 30 年代末に輸出減少、側面形状は三角形が多い
遮光装置仕様	北方	壁に窓を設け	他の三方は黒幕張り	黒	約三尺	約四尺六寸	約四尺	四十五度	側面形状は三角形で、45 度で上部に斜めに向かって突き出す
実態	北方	壁に窓を設け、2 階以上に多い	三方は板張り	黒	—	窓は不明。遮光装置は四尺以上	二尺以下	約六十度	明治 34 年以降普及、側面形状は三角形に近いが、上部は多様

※ [—] 不明

このように、日除けと遮光装置は、輸出に関わる検査設備という共通の役割を持ち、仕様や実態に類似点が多くみられるが、普及時期や詳細については違いがあることがわかる。

注目されるのは、普及時期の違いである。とくに、遮光装置が普及し始めた頃、日除けの役割が減じたと考えられることである。「横浜港主要輸出品輸出額」によると、明治 36 年にピークを迎えた茶葉の輸出は、明治 39 年には前年の約半分となる。ちょうどこの頃、生糸は徐々に輸出量を伸ばし、遮光装置が普及する。

この状況から判断すると、遮光装置は日除けを転用したり真似たりしてつくられた可能性がある。この裏付けとして注目できるのが、実態の側面形状と突き出し角度が似ることである。これらは、両方の仕様の相違点であり、かつ、仕様と実態が異なった箇所であった。

一方、実態において、設置場所、高さ、幅が異なることからすると、遮光装置は日除けを単に転用したり真似たりしたのではなく、参考にしつつも、異なる設備として出来上がったという見方もできる。それでは、設置場所、高さ、幅が異なるのはなぜだろうか。

設置場所については、先に述べたように、生糸では広大な荷解き場が必要だったため、遮光装置を 2 階に設置しなければならなかったのではないかと考えられる。

高さとは、検査用の光と関係すると考えられる。幅が広いと光を取り入れることが容易だが、幅が狭いと光を取り入れにくくなる。一方、幅を狭くして高さを高くすると、光の入射角が調整できる。遮光装置は、日除けよりも高さが高く、幅が狭い。これは、生糸の検査では、茶葉の検査よりも、絞り込んで調整した光を入れることが要求されたことを意味するのではないだろうか。この点では、遮光装置の設置場所が 2 階にあるのも、より安定した光を必要としたという見方ができる。これに対して、茶葉の検査では、拝見台という台に幾つかの茶見本を並べて審査する。このため、日除けの幅が広いのは、光の入射よりも幅広い光を必要としたということも影響しただろう。

幅については、建物の構造とも関係するものと思われる。日除けの多くは、開口部の確保が容易な木造に付設されている。木造の柱間は 1 間であり、そこに日除けを取り付けると、幅は 1 間に近づく。一方、遮光装置は先に見た通り、組積造への付設例が多く、大きな開口部には取り付けにくかった。

以上の違いを考えると、明治 20 年代以前は I-1 のように、茶の輸出用として使用していた日除けを、商館などが生糸と兼用で使用したことがあった。けれども、明治 20 年代以降は、生糸専用の遮光装置が日除けを参考にしながら、生糸用の独自の検査設備として考案されたと解釈できるのではないだろうか。

7 結び

本稿では、横浜の輸出生糸の検査に関わる建築にみられた遮光装置について以下のことを明らかにした。

- ①遮光装置は明治 20 年代初頭まで遡るものは少なく、明治 30 年代から昭和初期まで幅広い時代に見られ、昭和初期には標準的な仕様も確立していたこと。
- ②遮光装置の多くは、建物の北側の 2 階にあり、幅 3～4 尺、高さ 4～5 尺、側面形状が三角形に近く、角度が 60 度で突き出す形になっていたこと。

③遮光装置は、明治 34 年の生糸検査所増築時に設置され、それを契機に普及したと推定されること。

④遮光装置の設置の背景には、生糸検査方法の確立と生糸輸出の増加にともなう検査量の増加があったこと。

⑤遮光装置は、茶葉の輸出審査のための建築設備である「日除け」を参考にしつくった可能性があること

⑥遮光装置と日除けは、類似点が多いが、設置場所、高さ、幅について違いがみられ、検査設備として異なる点もあること

本稿では、産業に関わる建築物に取り付けられた細かな建築設備に着目した。そして、そうした設備が産業の変遷と深く関係しており、産業に関わる建築物の特徴をあらわすもののひとつであることを、明らかにできた。また、他の産業に関わる建物の類似した設備と比較検討することによって、両者の関係や相違点を明らかにすることができた。このことは、産業に関わる建築物の歴史研究における、設備に対する注目の必要性を物語っている。

なお、本稿では横浜における遮光装置のみに注目したが、他地域での生糸検査設備の様子については、今後の課題である。

<謝辞>文化庁建造物課の堀勇良博士、前農林水産消費技術センター横浜センター消費検査部の宮下昌則技術研究官には、生糸資料及び検査方法についてのご教示をいただいた。文末ではあるが記して感謝の意を表したい。

参考文献

- 1) 生糸改会社規則,国立国会図書館蔵,1873
- 2) 横浜貿易捷徑, 横浜新聞社,1893(よこれき双書第 13 巻復刻版,横浜郷土研究会,1995)
- 3) THE JAPAN ADVERTISER DIRECTORY,ADVERTISER PUBLISHING CO.,1903
- 4) 明治四十一年生糸検査所報告,農商務省生糸検査所,1909.6.11
- 5) スレート商会写真張,横浜開港資料館提供資料,1909
- 6) 肥塚竜:横浜開港五十年史 下巻,横浜商業会議所,1909
- 7) 実業之横浜,1911.10
- 8) 日本建築学会:建築雑誌 305 号,1912
- 9) 静岡県立農事試験場茶葉部・静岡県茶業組合連合会議所共著:茶業全書,静岡県茶業組合連合会議所,1915
- 10) 建築寫真類聚刊行會編:建築寫真類聚 銀行会社 卷 2,洪洋社,1917
- 11) MORTON-CAMERON.W.H.:PRESENT-DAY IMPRESSIONS OF JAPAN,Globe Encyclopedia,1919
- 12) 生糸検査所廳舎並ニ倉庫新宮概要,官籍管財局横浜出張所生糸検査所,1926
- 13) 吉村定雄:生糸品位検査並に格付の実際,明文堂,1933
- 14) 本田岩次郎・日本蚕糸業会編:日本蚕糸業史 第二巻,1935
- 15) 棚橋啓三:現代日本工業全集 8 生糸,日本評論社,1936
- 16) 藤本実也:開港と生糸貿易 上巻,開港と生糸貿易刊行会,1939
- 17) 藤本実也:開港と生糸貿易 中巻,開港と生糸貿易刊行会,1939
- 18) 藤本実也:開港と生糸貿易 下巻,開港と生糸貿易刊行会,1939
- 19) 横浜生糸検査所六十年史,農林省横浜生糸検査所,1959
- 20) 横浜生糸検査所編:検査時報 No.164,横浜生糸問屋協会,1962.7
- 21) 生糸検査格付の変遷(生糸検査制度調査(2)),農林省蚕糸局,1963
- 22) 横浜市史 第 4 巻上,横浜市,1965
- 23) 横浜生糸検査所編:生糸の総荷検査(肉眼検査)を語る I,検査時報 No.205,1966.1
- 24) 蚕糸技術第 80 号,1971.9,蚕糸技術研究会
- 25) 神奈川県立博物館編:横浜銅版画 文明開化期の建築,有隣堂,1982.12
- 26) 小島直紀:三井物産初代社長,中央公論社,1985
- 27) 建設省関東地方建設局営繕部監修:横浜生糸検査所建設記録,財団法人建築保全センター,1992
- 28) 横浜開港資料館編:図説横浜外国人居留地,有隣堂,1998.3
- 29) 生糸検査のはなし,農林水産省横浜農林水産消費技術センター・神戸農林水産消費技術センター
- 30) 横浜開港資料館・(財)横浜開港資料普及協会編:横浜もののはじめ考,(財)横浜開港資料普及協会,1988.3.25

注

- ① 今和次郎・竹内芳太郎:養蚕技術の変遷に伴う家屋の変化,1936,藤島亥治郎:日本の建築,至文堂,1958、伊藤鄭爾:民家は生きてきた,美術出版会,1963 他
- ② 吉田綱市氏の著書の他、塚田景他の都市史的な一連の研究ほか
- ③ 堀勇良:旧横浜生糸検査所(横浜地方検察庁)庁舎解体調査報告,横浜開港資料館紀要第 1 号,横浜開港資料館,1983 ほか
- ④ 文献 13)「肉眼検査 p29」

- 5) 文献 21)「肉眼検査 p4」
- 6) 生糸の検査方法は呼称・内容の変化が多く、文献 22) に詳しい。昭和 7 年に輸出生糸検査法が施行される以前、正規には肉眼検査と呼ばれていた。昭和 10 年輸出生糸検査法が改正され、総荷検査と改称される。
- 7) 文献 25) は『横浜諸会社諸商店之図』と『日本絵入商人録』(明治 19 年 6 月)の二部構成である。後書からは明確な遮光装置は確認出来なかった。
- 8) 明治 42 年刊行の文献 6) には遮光装置が設置されていない写真が掲載されている。これは、もともと南東にあった遮光装置を北側に設置し改めたからと考えられる。文献 19) によると、「明治四十年には予算三万二千元をもって本所の第三次拡張を断行するに至った。即ち品位部裏側に煉瓦造三階建建物を増築し品位検査室の拡張を主とし其の他諸設備を増加し(以下省略)」と、品位部の裏側に品位検査室を主に増築したことが記されている。この時期は文献 6) の時期以前なので、この際遮光装置を北側に移転したものと考えられる。
- 9) 文献 8)「三井物産会社横浜支店新築要領 p 54」、文献 23)「名称は肉眼検査か総荷検査か p1」。前掲・宮下昌則技術研究官・石黒善夫博士へのヒアリングによると、生糸検査に用いる窓は「拝見窓」と呼んだという。
- 10) 鏝戸が描かれているため遮光装置のような外部装置は設置できず、すべり出し窓の可能性が高い。
- 11) 文献 29) によると、1 括は 24 かせ。1 かせの重さは約 210g である。括解とは、括を解く作業のことである。
- 12) 文献 12) ,p2
- 13) 文献 23)「天然光線と人口光線による生糸の見え方 pp4~5」
- 14) 正量検査は、荷口の各俵・各ケースの正量を調べる検査。品位検査は、総荷整理検査と料糸検査がある。料糸検査は、生糸の再繰作業で、糸が切れた回数を調べる検査や重さ、太さを計り、ばらつきを調べる検査。
- 15) 文献 19)「第二次拡張と正量検査室 p83」
- 16) 文献 19)「検査法規定 pp19~20」
- 17) 文献 19)「生糸取締と検査 p2」横浜では明治 2 年 9 月民部省が蚕卵紙生糸改所を設置。明治 6 年 1 月生糸製造取締規則の発布。同年 6 月生糸改会社設立(同 12 年解散)。文献 1) には肉眼検査の記述は見られない。
- 18) 文献 23)「総荷検査の目的 pp2~4」、「昔の肉眼検査あれこれ pp7~8」
- 19) 文献 19)「生糸検査法の沿革 p159」
- 20) 文献 17) ,p624
- 21) 文献 18)「生糸直輸出の利害 p555」
- 22) 文献 13)「直輸出と商権回復 p349」、文献 24) ,中村富隆:生糸検査の歴史的役割と今後の方向 pp7~11
- 23) 文献 4)「検査件数 p4」
- 24) 文献 19)「第二次拡張と正量検査室 p84」明治 40 年には、煉瓦造 3 階建の建物を増築、品位検査室の拡張を行う。
- 25) 拙稿:横浜における静岡茶の輸出と日除けの発生について、計画系論文報告集 558 号,2002.8、
- 26) 文献 20)「第 8 表 p10」、文献 22) ,p258 次表
- 27) 文献 15)「輸出生糸検査法 p178」
- 28) 前掲:横浜における静岡茶の輸出と日除けの発生について、拙稿:静岡県の茶産業に関わる建築に見られた日除けについて、計画系論文報告集 547 号,2001.9、文献 9)「審査場の構造 p264」参照

(2006 年 6 月 6 日原稿受理、2006 年 10 月 23 日採用決定)